台大日本語文研究第 31 期
2016 年 6 月，頁 31-50
2016-03-31 收稿，2016-05-02 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.2016.31.30

試探《平家物語》中「歌物語式」様式

楊錦昌*

摘要

《平家物語》與< 歌物語> 代表作《伊勢物語》不同，在日本文學史中被歸類在軍記物語的文類中。然而，《歌語り・歌物語事典》中指出，有關《平家物語》與「歌物語」的關係，大多將重點放在《伊勢物語》和歌及業平相關故事的引用上。這是觸及《平家物語》與< 歌物語> 的少有論述，由此可見著眼於《平家物語》的「歌物語」研究仍然有限，因此本文試圖針對潛藏在《平家物語》中，不同於歌物語權威代表之作《伊勢物語》的「歌物語式」様式探討，其具體探討的文本實例是源頼政説話。

關鍵詞：《平家物語》、「歌物語式」様式、和歌、散文、頼政説話

臺灣大學學術期刊資料庫

* 輔仁大學日本語文學系副教授

On the mode of Quasi-utamonogatari Seen in *The Tale of the Heike*

Yang, Chin-chang*

Abstract

Unlike The Tales of Ise, the masterpiece of Utamonogatari (poem-tales), The Tale of the Heike is classified in the genre of Gunki Monogatari (A war chronicle) in Japanese literature history. However, as pointed out in "*The Dictionary of Utagatari(narrated poems) and Utamonogatari*," in terms of the relationship between The Tale of the Heike and Utamonogatari, emphasis has always been put on the quotations of Waka (tanka poetry) from The Tales of Ise and stories surrounding Narihira. Since this dictionary is one of the very few previous studies on the relationship between The Tale of the Heike and Utamonogatari, we consider that the studies on the area of Utamonogatari in The Tale of the Heike are still too few. Therefore, this present paper aims at investigating its unique mode of quasi-utamonogatari of The Tale of the Heike, which differs from typical Utamonogatari of The Tales of Ise, an authority on Utamonogatari. Specific examples cited in this research are based on The Narrative of Masa Yori.

Keywords: The Tale of the Heike, the mode of Quasi-utamonogatari (poem-tales), Waka (tanka poetry), prose, The Narrative of Masa Yori

* Associate professor , Department of Japanese Language, Literature & Culture, Fu Jen Catholic University

臺灣大學學術期刊資料庫

『平家物語』に見る「歌物語的」様式の一考察

楊錦昌*

要旨

日本文学史において『平家物語』は、「歌物語」の代表作『伊勢物語』と異なり、軍記物語のジャンルに分類される。だが『歌語り・歌物語事典』においては、『平家物語』と歌物語との関係について『伊勢物語』からの和歌の引用、及び業平関係の記事の引用に重点が置かれていることが指摘されている。これは『平家物語』と「歌物語」の関係に触れた僅かな先行研究の一つであるが、この視点に基づけば、『平家物語』において「歌物語」に着眼した研究は依然としてまだ少ないように思われる。そこで本発表では歌物語の権威としての『伊勢物語』と異なる『平家物語』に潜む独自の「『歌物語』的様式」を追究してみたい。その際、具体的に例を挙げながら考察するのは、源頼政説話についてである。

キーワード：『平家物語』、「歌物語的」様式、和歌、散文、頼政説話

臺灣大學學術期刊資料庫

* 輔仁大学日本語文学系副教授

『平家物語』に見る「歌物語的」様式の一考察

楊錦昌

一、始めに

管見に及ぶ範囲に基づけば、『平家物語』の和歌に着眼した研究論文は 1932 年以来の約 80 年間においておおよそ 30 本ほど発表されている。これらの研究は、主に「平家物語と和歌」、または「平家物語における和歌」に関わるものであり、それらの多くが『平家物語』という作品に見られる和歌を考察の対象にしたものである。これらの中でとりわけ先行研究によって言及される論文は、1966 年に発表された小松茂人「平家物語における和歌」[1]、久保田淳「平家物語と和歌」[2]、松尾葦江「覚一本平家物語と和歌－平家物語の時間・その二－」[3]などである。また、小松氏、久保田氏及び松尾氏の三人の研究成果を踏まえて考察したものとして、松田珠美氏の「覚一本『平家物語』の和歌に関する一考察」[4]が挙げられるものの、韻文と散文、もしくは和歌と物語（説話）のかかわりに重点を置き、それらに基づく複眼的な視点から行う論考は、筆者の調べた限りで言えば、必ずしも多いとは言いがたい。例として挙げることができるのは、佐佐木克衛「散文と和歌との関わりあいについて―『平家物語』の場合―」[5]、松尾葦江「歌文融合－中世文学における和歌と散文とのかかわり－」[6]等の論文にとどまり、さらなる研究を進めるべき余地が

臺灣大學學術期刊資料庫

---

1 小松茂人著『中世軍記物の研究』続（桜楓社）の初版発行は、1971 年 1 月 15 日であるが、本稿が参考にしたのは、1991 年 5 月 25 日の改訂版である。

2 「平家物語と和歌」『国文学解釈と鑑賞』32-10（至文堂、1967 年 9 月）。久保田氏はこの論文において、和歌の分類の外に「和歌が原典から離れて次第に脚色されてゆくこと」、及び「引歌についてのこと」に目を向けて論じている。

3 初出は『軍記と語り物』20（軍記物談話会、1984 年 3 月）であるが、本稿が参考にしたのは、『軍記と語り物』第 40 号記念復刊（軍記・語り物研究会、2004 年 8 月 31 日）である。

4 『皇学館論叢』25-2（皇学館大学人文学会編、1992 年 4 月）

5 『軍記物とその周辺　佐々木八郎博士古稀記念論文集』（佐々木八郎博士古稀祝賀記念事業会編集委員会（編）・早稲田大学出版部、1969 年 3 月）に収録される。

6 和歌文学の世界第十集『論集　和歌とレトリック』（和歌文学会編、1986 年

少なくない。『平家物語』と「歌語り」・「歌物語」との関係についての研究は、『歌語り・歌物語事典』[7]が次のように述べるように、いまだにきわめて限られたものである。

> 『平家物語』と歌語りとの直接的関係は想定できず、専ら歌物語の影響関係が問題になってくる。ただ、総合的な研究はほとんど手が付けられていないと言ってよく、和歌との関連を論じた中で若干触れられている程度である。

二、「歌物語」という用語が示す概念について

「歌物語」といえば、『伊勢物語』を思い浮かべる人が少なくないであろう。この「歌物語」という用語はその歴史が長く、前掲の『歌語り・歌物語事典』や『和歌文学辞典』[8]、または阿部俊子『歌物語とその周邊』[9]や福井貞助『歌物語の研究』[10]などの「歌物語」に関する論著では、中古の『栄華物語』巻第十四「浅緑巻」に出る「故殿の歌物語を書きもうけて、御調度をしもうけて待ち奉りたまひしかど」、同じく『源氏物語』「蓬生巻」に見える「はかなき古歌物語などやうのすさびごとにてこそ」、また中世の『徒然草』五十七段に見える「人の語りいでたる歌物語の、歌のわろきこそ本意なけれ」といった用例が取り上げられる。しかしながら、同じ「歌物語」とは言え、それぞれにおいてこの用語の意味するところが異なる。『歌語り・歌物語事典』に収録される中田武司の「『歌語り』・『歌物語』の発生と展開」[11]によれば、『栄華物語』の「歌物語」は、「恐らく『絵』を添えた『歌物語』」[12]であると見なされるのに対し、福井貞助『歌物語の研究』においては、『源氏物語』に見られる「古歌物語」は、「特定の種類の物語作品を指すという証拠はなく、むしろ『歌と

臺灣大學學術期刊資料庫

9月30日初版）に収録され、第三節（P277～282）に『平家物語』にみられる和歌的文脈の項目がある。

7 雨海博洋・神作光一・中田武司編（勉誠社、1997年2月10日）

8 有吉保編で1982年3月25日に桜楓社から出版される。

9 1980年に風間書房から出版される。

10 1986年に風間書房から出版される。

11 P13～23を参照。

12 P17を参照。

物語』と解すべきもの」とされる。一方『徒然草』の場合は、歌の物語ではなく歌についての話題という意味が強いと思われる。従ってこれらの作品における「歌物語」という用語が示すものは、前述の「短編物語集」としての概念や、もしくは明治以後に『伊勢物語』などの特定の作品を想定して設定された概念[13]とも明らかに区別されることがわかる。

とはいえ、中田氏は、中古以来近代に至るまで「歌物語」という用語によって示される意味を総括して、「ある歌について語った話――歌語り的なもの」、「歌に関する四方山話」、「歌の心をこめている物語作品」という三点を指摘している。この三点に共通するものは、和歌にまつわる話という点であるが、説話としての「歌物語」、話題としての「歌物語」、または作品としての「歌物語」は、それぞれ範疇としてのレベルが異なる。これに対し、現代における「歌物語」の概念について見れば、『和歌文学辞典』に収録される「歌物語」の項目において以下のように述べられる。

> ①平安朝物語文学の一様式。②『伊勢物語』『大和物語』『平中物語』など和歌を中心として構成された短編物語集をいう。本来的には、古くから伝承されている和歌について、その由来、創作事情を語るという形で発生したり（中略）屏風の絵について語ることなどによって生まれた③「歌語り」の発展したもので一首か二首もしくは一組の贈答歌を中心にした一つの場面によって成立したものと考えられる。（51 頁、通し番号は筆者による）

上記引用文の①～③から見てわかるように、ここでは、様式としての「歌物語」、作品（短編物語集）としての「歌物語」、そして贈答歌を中心にした一つの場面という形態から生成されたものとして

[13] 福井貞助『歌物語の研究』において、「文学史において、伊勢・大和を歌物語と称するようになったのは『和文学史』に始まる」と述べた後、また島津久基著『国文学の新考察』を生かし、「『歌物語』といふ語は故芳賀先生が好んで使はれたのであったが、典拠はすでに平安朝にある」と提起した上で、「明治に入って伊勢物語や大和物語を『歌物語』として総称することになった」と述べている。

臺灣大學學術期刊資料庫

の「歌物語」の三つの要素を挙げることができる。

そこでこれらを、前述の中田氏が纏めた中古以来近代に至るまでの「歌物語」に関する指摘と照らし合わせると、「歌物語」を下記の五つの類型に纏めることができる。

1.説話としての歌物語

2.話題としての歌物語

3.作品としての歌物語

4.様式としての歌物語

5.贈答歌を中心にした一つの場面という形態から生成してきた「歌物語」

なお、「歌物語」と中国文学との関連について目加田さくをは、「歌物語の先蹤」[14]において下記のような指摘を行っている。こうした観点は、前述の先行研究においてあまり言及されなかったものである。

> 時間の流れに従って、物語られる物語が、歌をもっているものである。即ち、連鎖式プロットの歌物語は、佛典に又、前掲の如く唐代伝奇（詩をもつもの）に迄遡る事が出来るのである。海洋遍歴譚が佛典から移入された如く、いくくさりにもくさりがつづいていく歌物語も亦、移入伝来された説話形式に外ならないのである。（中略）
>
> 以上の如くあとづけてくると、歌物語が、何等本邦独自の、又、日本オリジナルの様式であるとも言えなくなってくるのである。

また谷口洋は「『史記』にみえる秦末漢初の歌と傳説-荊軻・項羽・劉邦・呂后をめぐる歌物語」[15]において類似の指摘を行い、下記のように秦末漢初の中国文学の歌物語の類型を示している。

> 感情が極點に達した場面で歌が歌われ涙が流されるのは、項羽や劉邦の場合と同様である。（中略）劇的な場面で登場人物が歌

[14]『香椎潟　倉野憲司教授還暦記念特集』第 8 号（福岡女子大学、1962 年 12 月 25 日）P90-101

[15]『中國文學報』第 78 冊（中國文學會、2009 年 10 月）P1-53

臺灣大學學術期刊資料庫

を歌って涙を流すというのが、物語の一つの型として存在していたのだ。

類型化しているのは、歌をとりまく物語だけでなく、歌そのものもまたそうである。歌によって表される感情は、項羽の場合に典型的なように、悲しみや嘆きであり、また歌の中で自らの身の上を語ることが多い。

目加田氏が提示する「歌物語」が「日本オリジナルの様式であるとも言えなくなってくる」という見解は、和漢混交文の代表作である『平家物語』の「歌物語」に目を向けて考察を加えようとする時、新しい視点を提示してくれる。すなわち、和漢混交的な「歌物語」のパターンが『平家物語』に潜んでいるのではないかという視点である。この観点に基づきつつ、『平家物語』の和漢混交的な「歌物語」に注目すれば、谷口氏が提起する「感情が極點に達した場面で歌が歌われ涙が流される」「劇的な場面で登場人物が歌を歌って涙を流す」という点が、「歌物語」の類型を構成する看過できない要素であることに、留意したい。そこで、これを、上述の五つの「歌物語」の類型と結びつけることにより、覚一本『平家物語』における源頼政の説話世界に隠されている「歌物語」としての構成要素の可能性について、以下で論じたい。

臺灣大學學術期刊資料庫

三、『平家物語』と和歌から見る「歌物語」

日本文学史において『平家物語』は、「歌物語」の代表作の『伊勢物語』と異なり、軍記物語のジャンルに分類されるため、「作品としての歌物語」の側面を強調し難いものの、作品世界に『伊勢物語』から影響を受けた事実があることも否定し難い。「始めに」で取り上げた『歌語り・歌物語事典』の「歌語り・歌物語との関係[16]」の項目においては、『平家物語』と歌物語との関係について『伊勢物語』と『大和物語』からの和歌の引用、及び『伊勢物語』を中心とする業平関係の記事の引用に重点の置かれることが指摘されている。さ

[16] P425 において小野美典が解説している。

らに同書は、業平関係の記事の引用について覚一本の具体的な例として巻二「阿古屋之松」を取り上げることにより、『平家物語』と「歌物語」の関係について言及している。これは、『平家物語』と「歌物語」の関係に触れている僅かな先行研究の一つである。この視点に基づけば、『平家物語』における「歌物語」への研究の着眼点は、依然として『伊勢物語』に見られる「歌物語」の範疇から脱することができない。そのため、「歌物語」の代表作としての『伊勢物語』の権威から脱し、『平家物語』に潜む「歌物語」の姿を追究しようとするのが今回の試みの目的である。

この試みは整然とした論考の形ではなく、一つの覚書としてまとめてみるものである。タイトルで仮りに用いた「歌物語的」様式という表現は、筆者の造語であり、必ずしも『伊勢物語』に使われる、一般的な「歌物語」の概念に添ったものではない。本稿で述べる「歌物語」とは、和歌とその和歌にまつわる散文要素が強い言説を合わせて成り立つエピソード・説話・物語の構成・図式・パターンをその要素とし、それらの要素が満たされさえすれば、仮りに「歌物語」として認めようとする。これは、「始めに」で取り上げた「歌文融合」という概念に近いものではあるが、「和歌的雰囲気を帯びた文脈（和歌的文脈）」、並びに「歌語を多く含む文章」という点を重視しようとするものである。

また、『平家物語』と和歌の関連についての論考をあらためて概観してみると、「歌物語」という概念を意識して行われた論考は数少ない。例えば、前述した久保田淳の論において、覚一本『平家物語』に見られる和歌の中で短歌形式を採るものが97首、短連歌が3首で、合計が 100 首[17]であると指摘された上で、これらの和歌が、①「登場人物の個人詠」、②「古歌」、③「神仏の示現の歌」、④「落首」の

[17] 注2「平家物語と和歌」において、「ここでは覚一本系統に属する日本古典文学大系本に限ることにする。同本によれば、短歌形式を採るものが九十七首、短連歌が三首、計百首である。現在殆ど利用されることはないと思われるが、国歌大観には歴史歌集として、平家物語の歌を抽出している。歴史歌集の九七四番から一〇七一番までが平家物語の歌である。」とある。

臺灣大學學術期刊資料庫

四つのパターンに分類されている。一方、注 3 で触れた松尾氏の論においては、まず久保田氏の論に基づいて、「巻六までは平家に虐げられた人々の詠であるのに対し、巻七以降は平氏とその同情者に限られる。つまりは述懐の歌は、喪われゆく者、敗れ去る者の心情の表出を主要な役割としているといえようか」[18]と述べられた上で、『平家物語』における和歌の機能について、改めて①「和歌が、事件や人物の行動の原因となる場合」、②「予言性を有する和歌及び象徴的機能」、③「叙述のテムポを変える機能」、④「時間の総括・確認やたどり直しをする機能」、⑤「情緒的主体の人称を変える機能」の五つの類型に分けられている。これらの研究は、和歌を分類した上で、主に「和歌が原典から離れて次第に脚色されてゆくこと」、「引歌についてのこと」、そして「和歌の機能」といった側面に目を向けて論じたものであり、特に『平家物語』における「歌物語」に重点を置いて論じたものではない。

前述したように、本稿では、「和歌とその和歌にまつわる散文要素が強い言説を合わせて成り立つエピソード・説話・物語の構成・図式・パターンの要素が満たされさえすれば、仮に「歌物語」として認めようとする」立場を採用する。これは、松尾氏の述べる「歌文融合」や注 5 で示した佐佐木氏の述べる下記の立場にも近い。

> 以上見て来たように、散文と和歌との関わりあいの問題は、形式的には説話や物語等のそれを採り入れながらも、『平家物語』においては、それらとはまったく異なった新しい様式を創り出した、ということができる。
>
> 「語り」という決定的な契機を媒介として（中略）この両者が関わりあう構造は、「語り」によってもたらされる強力な残像効果を考慮に入れないわけにはいかない。（中略）『平家物語』における語り手と聴き手との緊張関係は、前者から一方的に後者へと与えられたものとしてあるのではなくして、両者が相互に影響しあうものとしてある。

[18]同注 3 に収録される。

臺灣大學學術期刊資料庫

佐佐木氏の論に基づけば、氏の見解は本稿の第二節で纏めた五つの「歌物語」の類型と重なるところが多いと同時に、「語り手と聴き手との緊張関係」という点も、谷口氏の提起した「劇的な場面で登場人物が歌を歌って涙を流す」という「歌物語」の類型と深く関わるように思われる。しかしながら、上記引用文で強調される「語り手と聴き手との緊張関係」、または「まったく異なった新しい様式」という点は、第二節で纏めた「歌物語」の類型と些か異なるところがあるように思える。したがって、本稿が取り上げたいのは、引用文のような『平家物語』における語り手と聴き手との緊張関係という「新しい様式」のことではなく、歌人や武将としての源頼政のように『平家物語』の作品世界に登場し、歴史叙述の筋を踏まえつつ、人物をめぐる和歌と説話を合わせて鎖のように繋いで人物の伝説を中心に作り上げられた「伝説的歌物語」である。これこそが『平家物語』に見られる「歌物語的」様式の例の一つに他ならない。

臺灣大學學術期刊資料庫

四、「頼政説話」から見る「歌物語」

前掲の久保田淳の論考によれば、平家物語における個人詠が最も多い主要な作者と歌数について、多いものから順に挙げれば重衡の7首、頼政の6首、忠度の4首、経正の4首、康頼の4首である。歌数から見れば頼政は2位であるが、勅撰集には61首も採用されており、この点では上記5名の歌人の中では一番多く勅撰集に採用された歌人である。『平家物語』に見られる頼政の6首の和歌は以下の通りである。

連番	国歌大観	巻	和歌
7	9	1	深山木の　そのこずゑとも　みえざりし さくらは花に　あらはれにけり
25	29	4	埋木の　花さく事も　なかりしに

			身のなるはてぞかなしかりける
26	30	4	人しれず　大内山の　やまもりは 木がくれてのみ　月をみるかな
27	31	4	のぼるべき　たよりなき身は　木のもとに しゐをひろひて世をわたるかな
28	32	4	ほとゝぎす　名をも雲井に　あぐるかな 弓はり月の　ゐるにまかせて
29	33	4	五月やみ　名をあらはせる　こよひかな （頼長） たそかれ時も　すぎぬとおもふに（頼政）

連番 7 の和歌は、巻一「御輿振」に見られるものである。源頼政が防ぐ北門を通って御輿が京に入る時、僉議者（雄弁者）である老僧豪運が、頼政の人物像について語り手の代わりに「頼政卿は、六孫王より以降、①源氏嫡々の正棟、弓箭をと（ッ）ていまだ其不覚をきかず。凡②武藝にもかぎらず、③歌道にもすぐれたり」[19]と描いている。つまり、源頼政は、①～③で述べられるように源氏の嫡流の血筋を持つ一人で、武芸にも歌道にも優れている文武両道の持ち主であるとして位置付けられているのである。また、そのやりとりの際の対応を見れば、頼政の知略にたけた姿を窺うことができる。とはいえ、作中では頼政の歌道の才能がひたすら強調されるばかりである。例えば、近衛院の在位の時の歌会にまつわるエピソードが語られ、それを通して連番 7 の和歌が作品に取り入れられる。この和歌は、『詞花和歌集』にも収録されており、深山の中で木が多くどれが桜なのか、見分けることができないものの、春が来ればすぐ分かるという意味である。歌中の「深山木の　そのこずゑともみえざりしさくら」が「しら大衆・神人・宮仕・専當みちみちて、いくらと云數をしらず」と掛かる一方で、「さくらは花にあらはれにけり」

[19] 本文引用は、高木市之助・大澤正夫・渥美かをる・金田一春彦校注『日本古典文学大系 32　平家物語』上（岩波書店、1959 年 2 月 5 日）による。

臺灣大學學術期刊資料庫

には、師高の流罪と師經の禁獄の御裁許を待てば、結果が出るということを婉曲に山門の徒衆へ伝えるという暗喩もあるのではないだろうか。もちろん、源氏としての頼政が平家政権の下で時節を待っているという説もある。しかしいずれにせよ、危機に直面した時の頼政の緊張感が頂点に達している瞬間に、散文としての説話に和歌を取り入れることにより、説話が和歌と関連・協調して築き上げるパターンは、とりもなおさず前述の「説話としての歌物語」、もしくは「話題としての歌物語」という類型に近く、すなわち一つの「歌物語」の様式であるといえよう。またこれは、歴史叙述が底流に流れる『平家物語』に見られる独特な「歌物語」の様式でもあろう。更に和歌が読まれた後、「と云名歌仕て御感にあづかるほどのやさ男に、時に臨で、いかゞなさけなう恥辱をばあたふべき」と発せられた言葉からは、第二節で提起した「劇的な場面で登場人物が歌を歌って涙を流す」という詠嘆的な類型が認められるだけでなく、和歌の霊力によって恥辱から脱した和歌の歌徳についても読み取ることができる。

次に連番 25 の和歌を見る。これは、巻四の「宮御最期」で語られる平等院合戦に敗れて自害する頼政が、「西にむかひ、高聲に十念となへ（西に向かって高らかに阿弥陀仏を十回唱える）」という場面で詠まれる辞世の歌である。歌中の「埋木の花さく事もなかりしに身のなるはてぞ」とあるのは、自分の人生の最期を譬える一方、「花さく事もなかりし」というのは、自分の生涯に立身出世することはないということを意味する。歌の修辞については別に論じるとしても、これらの和歌の表現は、辞世の歌に導かれる前の散文的な言説と前後呼応している。また、下の句にある「身のなるはてぞかなしかりける」という表現が、和歌の前に語られる「主のいけくびうたん事のかなしさに、涙をはらはらとながいて」、「最後の詞ぞあはれなる」といった詠嘆表現と、歌の後に出る「その頚をば唱取（ッ）て、なくなく石にくゝりあはせ」という感情表現と結び付いて縁語が鎖のように繋がって表現されることにより、頼政の辞世をめぐるエピソ

臺灣大學學術期刊資料庫

ードの軸線も描き出される。これは、前述の「感情が極點に達した場面で歌が歌われ涙が流される」とあるような秦末漢初の中国文学の「歌物語」の類型に繋がるものである。一方で、焦点をあらためて登場人物の頼政に戻してみると、「其時に歌よむべうはなかりしかども、わかうよりあながちにすいたる道なれば、最後の時もわすれ給はず」という記述は、依然として歌道に優れている、歌人としての頼政の人物像を強調するものであろう。

続いて連番 26～29 の和歌を取り上げる。この一連の歌は、すべて巻四の「鵺」に収められているものである。この四首のうち 26～27 の和歌は、二首とも頼政の個人詠の歌であり、和歌の機能の面から言えば、前述の松尾氏の論では「和歌が、事件や人物の行動の原因となる場合」に分類される。また、「目的意識があって、即ち自分の望むことを歌で訴えた場合である。成功すれば歌徳説話の形式になる」とも述べられるものである。つまり、26～28 の二首の和歌には、目的意識と歌徳説話の要素がともに含まれていると思われる。松尾氏の見解には賛同すべき点が少なくないものの、作品内容から見れば、この歌に目的意識はそれほど強く表れていないように思われる。いずれにせよ、以下に和歌と散文的な記述を具体的に見ることによって、「歌物語」の様式を確認してみたい。二つの和歌を下記のように並列して記述し、それぞれの構造や修飾関係を明らかにする。

26 番→人しれず大内山のやまもりは木がくれてのみ月をみるかな

27 番→のぼるべきたよりなき身は木のもとにしゐをひろひて世をわたるかな

これらの二首の和歌は、登場人物の頼政が歌ったものでありながら、贈答歌のように頼政の伝説を補うもののようにも見える。上のように二首を並べてみると、構成が同一であることがわかる。また、連番の 26 番の上の句の「①やまもりは」と下の句の「②月をみるかな」は、いずれも地の文（散文）に「26 - ①大内守護にて年ひさし

臺灣大學學術期刊資料庫

うありしか共、26 - ②昇殿をばゆるされず」とある記述と重なって一つの「歌物語」の様式に適っていることが知られる。のみならず、連番の 27 番の上の句の「27 - ①の身は」と下の句の「27 - ②世をわたるかな」とを合わせてみると、27 番の和歌は、地の文（散文）に「三位を心にかけつゝ」とある記述と重なって一つの「歌物語」の様式を構成していることがわかる。更には、保元・平治の乱に大きな功績を立てた頼政をめぐる記述において、保元の乱の「賞にもあづからず」、平治の乱の「恩賞これおろそか也き」、守護の「昇殿をばゆるされず」、そして正下四位の「三位を心にかけつゝ」といった自分史の伝記的な表現が述べられていることから、頼政の生涯で不遇な境遇の多いことが強調されているように思われる。これらも、また和歌に見られる「人しれず」「木がくれてのみ」、または「のぼるべきたよりなき」「木のもとにしゐをひろひて」と呼応しており、自分史のような伝記的な「歌物語」の様式をここに認めることができる。このような登場人物の伝記的な和歌と散文とによって構成される「歌物語」の様式は、最後の「年たけよはひ傾て」とある地の文の記述と、「世をわたるかな」とある 27 番の歌の表現とが呼応した後、「今年は七十五にぞなられける」という表現によって、エピソードの締めくくりとして呈示される。。

因果関係で言えば、因としての「述懐の和歌一首ようでこそ」と「この歌によ（ッ）て」とある記述、または果としての「昇殿をばゆるされ」、「昇殿ゆるされ」とある記述の中には確かに歌徳の要素が含まれており、もう一方では、歌人としての頼政の歌の才能も間接的に示されている。

次に巻四「鵺」に見られる連番 28 と 29 の和歌について見る。二首とも個人が歌うものではなく、連歌のように上の句と下の句がそれぞれ異なる人によって詠まれることで成立する歌である。二首とも頼政が変化物を退治した後、頼長と公能の歌う上の句に合わせて歌われた歌である。下記の小学館日本古典文学全集 29『平家物語』（1）巻四「鵺」の頭注で述べられているように、頼政の変化物の

臺灣大學學術期刊資料庫

退治の話は由来が一つである。

> 頼政の怪鳥退治であるが、二つとも話が似通っていて（終わりの連歌もそうである)、ややくどい気がしないでもない。根は一つの話であったが、時、所をちがえた二話となって伝承され、それを両方とも収めたためであろうか。(P345) [20]

この二つの話がどのように連番 28 と 29 の和歌と関わってくるのか、以下に確認してみたい。

28→ほとゝぎす名をも雲井にあぐるかな　弓はり月のゐるにまかせて

29→五月やみ名をあらはせるこよひかな　たそかれ時もすぎぬとおもふに

上記のように二つの歌を並べてみると、全体的な歌の時間は連番 28 が夏の鳥の「ほとゝぎす」が出る四月であり、連番 29 が五月であり、両者はあまり関連がないように見える。しかし「ほとゝぎす」には「夕影鳥」と「夜直鳥」という名があり、頼政の夜の怪鳥退治の時間を反映することに繋がる表現である。つまり、これにより、和歌と散文としての怪鳥退治の両者は、全体的な「夜」という時間で関連していることになる。また、二つの歌の上の句と下の句を見ると、頼政の名を揚げる箇所の表現には、連番 28 の空間を表す「雲井に」と、連番 29 の時間を表す「こよひかな」という違いがあるものの、下の句の具象（空間）を表す「月（弓はり月)」と、抽象（時間）を表す「時（たそかれ時)」とが重なっているように見える。このような和歌の特徴を、頼政の怪鳥退治の地の文に照らし合わせてみると、一番目の鵺に似た怪鳥退治の表現は「雲のなかにあやしき物の姿あり」とあるように空間的、具体的なイメージが強いのに対して、一方、二番目の鵺退治は「目さす共しらぬやみではあり、すがたかたちもみえざれば、矢つぼをいづくともさだめがたし」とあ

[20] 市古貞次校注・訳者『日本古典文学全集 29　平家物語』1（小学館）の初版発行は、1973 年 9 月 30 日であるが、本稿が参考にしたのは、1979 年 6 月 1 日の第七版発行のテキストである。

臺灣大學學術期刊資料庫

るように、時間的、抽象的な印象の強いことが分かる。したがって、ここでも怪鳥退治の和歌と散文とが合わさることで、頼政が武芸と歌道の文武両道であることを表す伝記的な「歌物語」の様式の潜んでいることが確認できる。そればかりでなく、連番 28 にも連番 29 にも「君も臣も御感ありける」、「御感なのめならず」というような感動的な表現があるが、これは、秦末漢初の中国文学の「歌物語」の類型と同じように、感情が極點に達した場面で和歌が導入され、効果的な感情表現が作品に採用される点に一致するものであると言えよう。

なお、巻四「鵺」において、「弓矢をと（ッ）てならびなきのみならず、歌道もすぐれたり」とあるように頼政の武芸と歌道の文武両道ぶりを強調することは、巻一「御輿振」で述べられる頼政の人物像と重なることが多いものの、山門への対応ぶりから見れば知略にたけた頼政の姿は窺えない。これは、或いは巻四「鵺」の最後に「さておはすべかりし人の、よしなき謀叛おこいて、宮をうしなひまいらせ、我身もほろびぬるこそうたてけれ」とあるように、語り手による頼政への批判と一致するものと解することができるかもしれない。つまり、以仁王と結んで平氏打倒の挙兵を計画したのは、知略によるものではなく、愚かさによるものだとして源頼政を批判しようとする「鵺」説話の作品としての意図が現れていると読めるのである。

臺灣大學特殊館藏資料庫

五、まとめ

以上、源頼政の和歌を例として『平家物語』に見る「歌物語的」様式について概観した。ここで認められるものとしては、『伊勢物語』に見られるような「歌物語」の範疇に入るものもあるが、『伊勢物語』の権威から脱する「感情が極點に達した場面で歌が歌われ涙が流される」とあるような秦末漢初の中国文学の「歌物語」の類型等に繋がるものもある。以上の考察に基づき簡単にまとめれば、以下のように指摘できる。

まず、『平家物語』に見る「歌物語的」様式は、「歌について語る」、「歌に関する四方山話」、「歌の心をこめている物語作品」、「歌文融合」といった類型ではなく、いずれも和歌と散文が相互に呼応したり、対等に補ったりするものであることが確認できる。

また、緊張感が説話の展開の頂点に達した瞬間に散文としての説話に和歌を取り入れることにより、説話が和歌と関連・協調して築き上げる「歌物語」のパターンのあることが認められる。ここには、単なる人物にまつわるものだけでなく、説話の底流に流れる『平家物語』という作品の歴史叙述を潜ませている独特な「歌物語」としての要素が見られる一方、和歌の霊力によって恥辱から脱した和歌等の歌徳説話についての要素や機能をも読み取ることができる。

次に、縁語的な鎖の如く繋がる様式、「劇的な場面で登場人物が歌を歌って涙を流す」というように、和歌を導入する前後において劇的な場面で登場人物が涙を流したり感動したり嘆いたりするような詠嘆的な類型、そして中世という時代を強く反映するものとして異なる人物によって作りあげられた歌から構成される連歌的な「歌物語」のパターンなどが確認できる。

また、連番 28 のような空間的・具体的表現と、連番 29 のような時間的、抽象的な対照表現が呼応することによって反映される「歌物語」のパターンや、26・27 のように一首か二首もしくは一組の贈答歌を中心にした一つの場面によって成立する類型も目立つ。

さらに、頼政を例にして考察した結果の中には、自分史や登場人物の伝記的な和歌と散文とによって構成された「伝説的歌物語」と言えるような「歌物語」の様式も明らかに存在していると言える。前述した頼政と関連する「歌物語」に見られるこれらの類型やパターンは、『平家物語』における「歌物語的」様式の一端に過ぎないものの、そこには『平家物語』という作品の類型や要素を認めることができる。というのは、「歌物語」的類型と要素の中に『平家物語』という作品の底流に潜んで流れる歴史叙述に通じる様式を見い出すことができるからである。

臺灣大學學術期刊資料庫

ここでは以上の諸点を指摘しつつ、「歌物語」的類型と歴史叙述に関するさらなる考察については、今後の課題としておきたい。

【付記】本稿は中華民国行政院科技部の研究助成（助成番号103-2410-H-030-060-MY2）を受けた研究による成果の一部であり、2015年7月18日に行われた台湾日本語文学会第317回例会での発表に加筆修正したものである。ここに記して感謝の意を表します。

参考文献

高木市之助・大澤正夫・渥美かをる・金田一春彦校注（1959）『日本古典文学大系32　平家物語　上』岩波書店

目加田さくを（1962）「歌物語の先蹤」『香椎潟　倉野憲司教授還暦記念特集』8、p. 90-101　福岡女子大学

久保田淳（1967）「平家物語と和歌」『国文学解釈と鑑賞』32-10、p.233-238　至文堂

佐佐木克衛（1969）「散文と和歌との関わりあいについて―『平家物語』の場合―」『軍記物とその周辺　佐々木八郎博士古稀記念論文集』、p. 353-370 早稲田大学出版部

小松茂人（1991）「平家物語における和歌」『中世軍記物の研究　続』、p.114-130 桜楓社

市古貞次校注・訳者（1979）第七版発行『日本古典文学全集29　平家物語　1』小学館

阿部俊子（1980）『歌物語とその周邊』風間書房

有吉保編（1982）『和歌文学辞典』桜楓社

福井貞助（1986）『歌物語の研究』風間書房

松尾葦江（1986）「歌文融合－中世文学における和歌と散文とのかかわり－」『論集和歌とレトリック』、p.277-282　和歌文学会

松田珠美（1992）「覚一本『平家物語』の和歌に関する一考察」『皇学館論叢』25-2、p.48-73 皇学館大学人文学会

臺灣大學學術期刊資料庫

雨海博洋・神作光一・中田武司編（1997）『歌語り・歌物語事典』勉誠社

松尾葦江（2004）「覚一本平家物語と和歌－平家物語の時間・その二－」『軍記と語り物』40 記念復刊、p.37-48　軍記・語り物研究会

谷口洋（2009）「『史記』にみえる秦末漢初の歌と傳説-荊軻･項羽･劉邦･后をめぐる歌物語」『中國文學報』78、p.1-53　中國文學會

臺灣大學學術期刊資料庫